

舞踊学会第23回定例研究会報告

例会企画 講演とパフォーマンス

「雅楽・舞楽にみる日本の雅」

《テーマ設定の趣旨》

倭しうるはし奈良の地での開催となりました第23回定例研究会では、「雅楽」に着目しテーマを考えました。雅楽は、5世紀頃から9世紀にかけ、古代のアジア大陸諸国のいくつかの音楽と舞が仏教文化の渡来と前後して、中国大陸や朝鮮半島から日本に伝わってきました。それらの諸芸を源流にしたものを、平安時代の王朝貴族たちがまとめ直し、現在に伝わる雅楽の基となったといわれています。本例会では、そうした「雅楽」を継承してきた天理大学の雅楽部とダンスのパフォーマンスのセッションを組み入れました。天理大学雅楽部は、昭和26年に発足し、天理大学名誉教授の佐藤浩司先生のご指導のもと、昭和55年の東大寺昭和修理落慶法要に際し、幻の天平芸能と呼ばれていた伎楽の復元に携わるなど、顕著な活躍をしてきました。生きた雅楽の生演奏に加え、雅楽の成り立ちとその伝承、さらには、復元されるにいたった過程など、佐藤先生から貴重なお話をしながら、「雅楽・舞楽にみる日本の雅」をテーマに迫っていきました。

まず、パフォーマンスとしては、雅楽の演奏（越天楽）と金子佑紀氏（黒田育世、笠井瑞丈等の振付け作品に出演）と仙波晃典氏（ルイス・ガレー、田村興一郎の振付け作品に出演）のコンテンポラリーダンサーとのセッションにより、古代から伝承された雅楽の演奏と新たに創造されるダンスとの融合をご披露していただきました。



続いて、天理大学雅楽部に、左方の「蘭陵王」と右方の「納曾利」を演じていただきました。



最後に佐藤先生に「雅楽における雅」としてご講演いただきました（講演の報告は97ページ以降に掲載）。

（文責：塚本順子）

《曲の解説》

●舞楽

舞楽は、左方と右方の二つに分類されている。演奏形態は、主に左方は唐楽、右方は高麗楽である。又、舞の姿から平舞と走舞、文舞と武舞、そして子供の舞う童舞の別がある。楽器編成は、左方では管絃と同じ三管三鼓が用いられ（今日では両絃は用いられない）、右方は羯鼓の代わりに三ノ鼓を用い、高麗楽の演奏の場合、鳳笙を外し、龍笛の代わりに高麗笛を用いる。

●蘭陵王（らんりょうおう）

唐楽、壱越調、中曲の走舞。舞人は一人で、襦袢装束を纏い、豪華な面を付け、右手には金色の桴を持つ。林邑の僧である仏哲が伝えた曲とされ、752年の東大寺大仏開眼供養会でも演じられた。

6世紀の中国・北齊時代、山東省に属する蘭陵県の王、高長恭は天性の美貌の持ち主であった。兵士たちはその眉目秀麗な容姿に見惚れてしまい、戦いの士気があがらない。そこで自らの美しい顔を獐猛な面に隠して戦いに挑んだところ、見事大勝利を収めた。この曲はその勝利を称えて作った曲「蘭陵王入陣曲」に由来したものとされている。

笛、太鼓、鉦鼓による小乱声から始まり、乱序、音取、当曲、安摩乱声の順に奏して、舞う。

●納曾利（なそり）

高麗楽、高麗壱越調、新楽、小曲。右方の舞の代表的なもので、走舞のなかでは唯一、二人で舞う。『教訓抄』には「納蘇利」と書かれており、双竜舞や落蹲とも称される。舞の由来は不明だが、納曾利の「ナ」は鬼を意味し、「ソリ」は歌のことであると朝鮮語から解釈する説もある。二匹の竜（親子とも雌雄とも言われている）が遊び戯れる姿をあらわしている。舞人は右方舞の襦袢装束で、袍の上に毛縁の襦袢を着け、銀の当帯を締める。差貫袴で絲鞋をはき、竜の爪や稲妻をあらわすといわれる銀の桴を持つ。面は紺または緑色で銀色の目と牙で顎と牟子をつけ、あたかも鏡に写し出したように軽快に舞う。舞楽作法は、高麗笛の主奏者と太鼓、鉦鼓による高麗小乱声にはじまり、当曲の破が奏されるなか舞人が舞台にのぼり、急を舞い、この曲で退出する。独特の楽節を持ち個性ある旋律が展開される。舞の持つ軽快さとは裏腹にも悲しい旋律であるが、破・急とも高麗楽曲最高の傑作と称されている。

《天理大学雅楽部プロフィール》

昭和26年（1951）、日本の優れた芸能である雅楽の研究、演奏技術の習得、ならびに普及を目的として、課外活動のクラブとして創部。天理、大阪、東京に於ける定期公演をはじめ、各地で公演を行っている。

海外公演も、昭和50年（1975）の韓国、香港、台湾での公演を皮切りにアジア、南北アメリカ、ヨーロッパ、ユーラシア、オーストラリアなどで行い、平成27年、ベトナム及び韓国（慶州）への公演で27回を数え、訪問した国も、延べ50カ国となった。

昭和55年（1980）、東大寺昭和大修理落慶法要に際し、NHKの委嘱により、幻の天平芸能と言われている伎楽の復元演奏をつとめ、以来毎年一曲ずつ復元を重ね、平成4年（1992）に文献に現れている伎楽曲を一通り完成した。同年、薬師寺の依頼により、新伎楽「三蔵法師」を演じ、平成8年（1996）に全5作の完成をみており、平成13年（2001）には総集編ができ、毎年公演を行なっている。この他、吹奏楽や現代邦楽、ジャズ、前衛舞踏との共演、催馬楽や舞楽等の廃絶した曲や舞の復元試作演奏にも取り組んでいる。

昭和59年（1984）には、CBSソニーより雅楽部初のレコードがリリースされ、のちにCDとなって発売された。道友社より「雅楽—奏楽練習のために」と題して、平成12年（2000）には、盤渉調と黄鐘調を、平成14年（2002）には壱越調と双調、太食調に続いて平調、平調Ⅱ、双調Ⅱ、壱越調Ⅱ、盤渉調・黄鐘調・太食調Ⅱの計10枚のCDが出され、好評を博している。

平成12年（2000）12月、学校教育現場における雅楽の普及活動が評価され、国際ソロプチミスト奈良—まほろば—のシグマソサエティ会員に認証され、平成13年（2001）、ポーラ伝統文化財団より、第21回伝統文化ポーラ地域賞を受賞した。

《佐藤浩司先生のプロフィール》

昭和21年10月21日北海道生まれ。昭和41年4月、天理大学文学部宗教学科入学。同45年3月卒業。昭和45年天理教本科入学、同47年卒業。昭和47年4月天理大学文学部助手、兼同おやさと研究所研究員。講師、助教授の後、平成8年人間学部教授。平成9年4月、おやさと研究所主任を経て、天理大学名誉教授。天理大学雅楽部総監督。天理市ロビーコンサート実行委員会副委員長。京都女子大学、京都教育大学非常勤講師もつとめる。

昭和47年、天理大学に奉職後、今日まで雅楽部の指導に当たる。編著書として『雅楽稽古抄』（天理教青年会）、『お道の常識』（道友社、2004年）。『雅楽—源氏物語のうたまい』（道友社、2012年）。「火・水・風」「越殿楽序・破・急」、「蹴鞠楽」「遷座楽」などの雅楽曲の作曲もある。昭和55年、東大寺昭和大修理落慶法要に際して、幻の天平芸能と呼ばれていた伎楽の復元に携わり、以来、薬師寺における「玄奘法師 求法の旅」（本年で26回目）を始め、伎楽の復興と新作に取り組んでいる。雅楽における催馬楽の復元も、毎年1曲、現在25曲を復曲しており、その他廃絶した曲や舞の復元にも取り組んでいる。